

# The Gallery voice

NO-42

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX (098) 888-6117 / 2010.5.15  
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haeburucho Okinawa JAPAN www.galleryokinawa.com

## カメラマンになりたかった少年の話

森口 豁

大人になったらカメラマンになるんだー。

少年の頃の僕の夢だ。それも報道カメラマンになりたかった。伯父からもらったドイツ製の小さなボックスカメラが映し出すモノクロ写真。その魅力にはまり、習っていた油絵もやめて写真に没頭した。

高校時代にはよきライバルが現われ、学校が休みになると雪の秋田や新潟など日本海沿岸の農漁村などを一緒に歩き、はやりのリアリズム写真に入れ込んだ。テレビ放送はすでに始まっていたが、芸術の場でも報道の場でも写真の果たす役割の大きな時代だった。木村伊兵衛や土門拳、海外ではブレッソンやドアノー、キャバラが個性を競っていた。

僕の写真はカメラ雑誌の月例コンテスト(高校生の部)に度々上位入選、被写体も次第に社会性のあるものへと変わっていった。いまは東京ディズニーランドや首都圏のベッドタウンと化した千葉県の浦安に足しげく通ったのは1955年だったか。当時の浦安は、山本周五郎の小説「青べか物語」そのままの、貝や海苔で生計をたてる鄙びた漁師町で、このとき撮った写真は「アサヒグラフ」の見開き2ページを飾った。ギャラはサラリーマンの初任給の2倍以上。思いもよらぬ大金を握りしめ、日本橋のカメラ店に行き欲しかったオリンパス35を手に入れた。

そんな日常を〈沖縄〉との出会いが変えた。同窓の金城哲夫に導かれ、1956年春、米軍政下の沖縄を初めて訪ねた。学友ら15人からなる2週間の「親善訪問」だったが、目のあたりにした「もう一つのニッポン」の存在は鮮烈だった。日本がまぎれもなく「分断国家」であったこと。しかもその一方はアメリカの占領下…。沖縄の人たちへの申し訳なさを自分で責めた。僕の心の中に「ヤマト vs 沖縄」という切っても切れない方程式が根を下ろした運命的な体験だった。軍用地接收や「赤い市長」の追放など、米軍の横暴が多感な青春を灰色に染めた。

翌年夏、今度は1人で沖縄を訪ねた。目的は「オキナワ」を日本人に知らせるための撮影旅行。暑い夏の1ヶ月、足を棒にして歩きまわった。住む土地を追われ、代替地のかや葺き小屋で暮らす読谷村楚辺の人たちや、金武や辺野古の山野でうなりを上げる基地建設のブルドーザー。一方で、貧しいながらも互いに支えあって生きる子どもたちの素顔にうたれ、カメラをむけた。

写真は、沖縄の土地闘争を描いた火野葦平の「ちぎられた縄」の公演(劇団文化座)会場に展示したり、新聞社や雑誌社に持ち込んだりして、ささやかなが

らも「沖縄報道」の草分け的役割をはたした。

琉球新報の記者になり沖縄に飛び込んだのは1959年1月。米軍政下では、特殊技能を持たない「非琉球人」が沖縄に住むことは許されなかったため、沖縄ではだれもやる者のいなかった写真の修正技術を身につけ、在留資格を取っての移住となった。

新聞社は「写真が撮れる記者」として僕を重用した。どんな取材でも僕1人出せばたいはいは間に合ったからだが、おかげでおいしい仕事をたくさんさせてもらった。5年間の在職中に尖閣諸島などの無人島を含め40余りの島々を踏破した。

《こんなにたくさんの離島を歩いた人間は沖縄では君ぐらいではないか》

先輩からよくそう言われた。真夏の炎天下でも冬の荒海でも、サバニに身を託して島々を飛びまわることが多かったため、海んちゅも驚くほど真っ黒に日焼けしていた。



アイゼンハワー米大統領来沖 1960年 旧嘉手納村

今回の展示作品の大半は「アメリカ世」の沖縄を撮った写真だ。「趣味の域を出ていないじゃないか」と言われればそれまでだが、泡盛のコース同様、長い間寝かせてあったのでそれなりの風味もあれば、歴史の証言者としての価値もあろうと、画廊からの話をうけた。

この50年、沖縄を舞台とした僕の表現／報道活動は、写真やテレビドキュメンタリー、そして活字など異なるメディアを動員してのものとなった。より多くの人たちに〈沖縄〉を知らせるには使えるものは何でも使おうと考えたからだが、手を広げすぎたためか、結果的にはどの仕事も中途半端になった感否めない。不満や批判は甘んじて受け入れるしかない。

(もりぐち かつ／ジャーナリスト・映像作家)

## 多面体のエネルギー

高良 勉

森口豁さんと出会い、親交を結ぶようになったのは、沖縄の日本復帰直後の松永闘争を支援する市民会議に共に参加している頃だった。以来 40 年近く、私にとっては優しい先輩であると同時に精神的なドゥシ（同志）である。彼は、1958年に琉球新報社に入社し、15年間沖縄生活を送った。私が出会った頃は、日本テレビ記者（沖縄特派員）であった。

森口一家が、沖縄を離れるとき、その送別会は私の生地・新原ビーチでバーベキューをやった。なつかしい写真の中の岡本恵徳氏や山口恒治、知念幸栄氏は、もうこの世にいない。森口さんの愛娘である、ゆうな、かんな、あだんちゃんはまだ幼児の 74 年であった。それでも、森口さんはその後も沖縄とヤマトの二重生活をしたり、毎年沖縄へ通って取材・表現・闘争を続けている。

周知のように、彼は多面的な才能を発揮し、それぞれのジャンルで高い評価を受けた表現活動を行っている。インターネットの百科事典『ウィキペディア』で森口豁を調べると、「日本のジャーナリスト」と紹介されている。

彼のテレビドキュメンタリー作品は、ほとんど視たと思うがとりわけ『ひめゆり戦史・いま問う国家と教育』と『乾いた沖縄』、『島分け・沖縄鳩間島哀史』から受けた衝撃と問題提起は、現在でも私の内面でくり返し波打っている。

一方森口は、記録文学作家としての著書も多く、しかも高く評価されている。『子乞い 沖縄孤島の歳月』は「瑠璃の島」としてテレビドラマ化されマンガにもなり、『最後の学徒兵』は演劇化され那覇市民会館でも上演された。また、近年は『だれも沖縄を知らない』で沖縄タイムス出版文化賞を受賞した。それらの中でも『ヤマト嫌い／沖縄言論人・池宮城秀意の反骨』（1995年、講談社）は忘れがたい。何故、大和人の森口が「ヤマト嫌い」の大冊を書いたのか……。

さて、今回の画廊沖縄による「日米安保改定 50 年企画」の森口豁展「さよならアメリカ」は写真とドキュメンタリー映像がメインである。森口は、昨年から今年にかけて琉球新報で写真・文による「フラッシュバック」シリーズを連載した。

私は、1950年代から 90 年代までかけて森口が撮影した写真を見つめ、取材した文章を読んで何度も涙グウルグルした。例えば 56 年に糸満で撮った「第 1 次ベーパーブマー」には、7 歳の頃の私と同世代の姿が写っている。60 年の「名護の七曲がり」では、路線バスの対向車線を 6 台以上の戦車が我が物顔で走っている。63 年に伊平屋島での「子守の子ら」の姉と私の記憶を揺

さぶる写真。

そして、忘れがたいのは久高島で白装束の神女たちの上空を飛行機雲を引きながらジェット戦闘機が飛んでいる写真だ。この 1 枚は、比嘉康雄が撮れなかった久高島の一面の姿である。ここに、森口が視続けた戦後オキナワが象徴的に表現されている。彼は、島々の個性ある物語と古代から続く伝統文化や祭祀を視つめつつ、それらを切り裂いていく米軍政植民地オキナワの現実から決して視線をそらさない。ここに、多面的表現者としての森口の一貫した思想とエネルギーの源があるのではないか。

その思想が、信頼されて余りあるのは森口が常に自己のジャーナリストとして、またヤマト人としての責任を自覚し自問自答して止まないからだと思う。森口さんにとっても、もはや「沖縄問題」というのは存在しないだろう。在るのは、「日本問題」であり「差別問題」や「人間問題」としての根源的な問いかけであるはずだ。



米軍機飛ぶ空の下で 1963年 久高島

なぜ、そこまでオキナワに関わるのか。それは、玉川学園で盟友・故金城哲夫（『ウルトラマン』シナリオライター）と出会い大学を中退してまで当時外国の琉球新報社に入社した青春の原点を手放さないからであろう。今回の個展は「さよならアメリカ」となっているが、「さよならニッポン」という無声のうめきが聴こえて来るようである。それらの声々（以上）がざわめいている写真・映像群に出会うのが楽しみだ。

（たから べん／詩人・批評家）

## 肝苦り結歌

大嶺沙和

金城哲夫との学生時代からの付き合いを通して、日本で生まれた者としての立場から、沖縄の問題に50年以上も向き合ってきた森口豁。金城が『ウルトラマン』の中で、沖縄と日本の関係を怪獣や異星人の物語に置き換えて映像化したのに対し、まるで光と影を分け合う双子のごとく、森口は沖縄の生活の場を取材して集めた映像を、ドキュメンタリーとして提示し続けた。森口はシマジマをまわり、そこに息づく人の家を訪れ、壊れた納屋を直したり、作業を手伝ったり、酒を酌み交わしたりしながら、対話した。彼の取材は、ウチナーンチュの日常の断片をただ切り取るようなものではない。森口は、海や石灰岩や亜熱帯性雨林のなまぬるい風が吹く暮らしの中に、繊細かつ無骨に入りこみ、日に焼けた手と手を取り合うようにして、人々の声にカメラを向ける。彼の映像の中の、話をするオバー達の部屋にかけてある布や写真やトートーメーを見ると、まるで線香と畳の匂いがたちこめてくるような気がする。少年がコザを歩きながら話すシーンは、町の喧噪に浮き足立つ気持と、緊張と不安の入り混ざった感覚を思い出す。そんな沖縄の生活感あふれる映像の中で語られることは、それぞれの土地に奥深く根ざした様々な問題であるが、それらを掘り起こしていくと、全て日本の政治のあり方が浮き彫りになってくる。

太平洋戦争で日本の要石としてアメリカからの攻撃を最前線で受け、今も在日米軍基地の75%も背負う私達の島の、無数の日常の中で歪む状況。政治を行う都市を国家の中心部としている日本の中で、沖縄は地理的な理由から、様々な問題のしわ寄せを被る。森口は、国家の決定事項がどのように沖縄の人々の生活に浸みこみ、血や汗や涙を生み続けているかという証拠をすくいとってきた。『空白の戦史・沖縄住民虐殺35年』では、日本語以外の言語を使う者をスパイとみなすという機密事項が書かれた日本軍司令部の綴りが、『海は哭いている』では、石垣の白保が最も基地建設に適している事が示された米軍の研究レポートなどが取り上げられる。また、国家権力を行使する立場にいる少数の者が、いかに個々人の人生を追いつめてしまうかを凝視する。女学生たちを戦地に向かわせた西岡部長（『ひめゆり戦史・いま問う国家と教育』）、飛行場建設に加担する市長（『海は哭いている』シリーズ）や、太平洋戦争中に無罪の一般人を処刑した部隊にいた元日本兵（『空白の戦史・沖縄住民虐殺35年』）にまで取材し、彼らの言い訳も逃さない。権力を行使する立場にいるのも人間であり、それぞれの持つ弱さや勝手さや、様々な責任問題が森口には見抜かれている。森口のドキュメ

ンタリーはけして、問題を基地の周辺で暮らす者や、過疎化する島の人々だけのものに留めたりはしないのだ。沖縄で起きている事態を彼は一貫して、日本で暮らし、税金を納め、選挙に行き、政治家に国家運営を委ねる日本人の問題として見つめている。日本人でも、ウチナーンチュでも、別の国の人でも、国家や戦争や権力や可能性を見返すために、あり得るかもしれない行動について無限に空想するために、彼の映像の中の人々は苦しい状況を語りかけてくれるのだ。

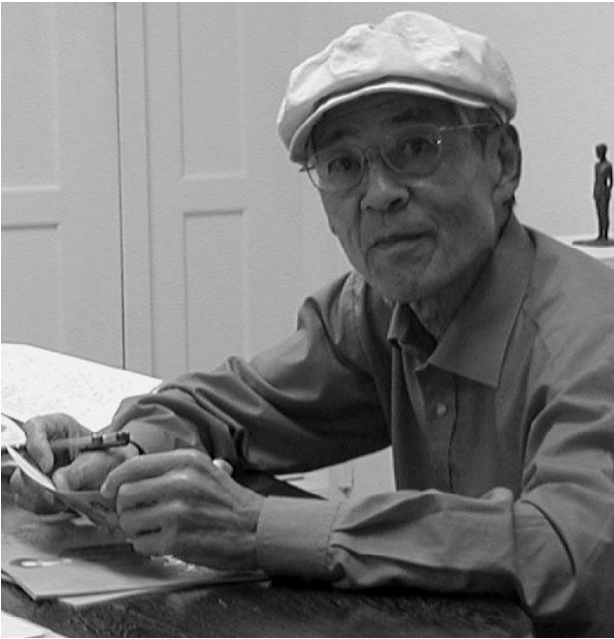


子守の子ら

1963年 伊平屋島

沖縄の中にある多様な問題に関心を寄せつつも、日々の生活に追われ、自分の身の回りにしか集中できないような私達の代わりに、この人はいてくれるのかもしれないとすら思う事がある。きっと、自分の場所にある痛みを共有し、別の場所の痛みとの違いを思い合える人が、この島にはたくさんいるだろう。それでも、生活範囲の外へ出ることが難しい境遇もある。森口の映像を見ることは、多数の他者となつながら、様々な場の状況を想像力をかき立てる機会である。上映会場の隣で座る者への、遠くのシマや別の国に住む人間への肝苦りさあをより深化させながら持ち続けるために、本気で励まされる作品群である。  
(おおみね さわ/映像研究)

# KATSU MORIGUCHI



## 森口豁について

森口豁氏は1937年東京生まれ、米軍統治下の1956年の春、玉川学園高等部の学友たちと使節団として沖縄を訪れている。コザ高校の生徒たちと交歓会を行い、沖縄本島各地に足を運んだ。18歳の豁青年は持参した愛用のカメラで当時の沖縄を激写した。戦争が終わって11年が経っているのに、米軍がはばをきかず戦時下さながらの風景がひろがる。沖縄はまだ米軍支配下だった。パスポートがなければ行けない外国である。終戦後とはいえ、人びとの暮らしは東京とはほど遠い芋と裸足の貧しい生活だ。人びとは人なっこくやさしい。戦争の悲しみ乗り越える笑顔は南国の太陽の下でまぶしいほどに明るい。同じ日本語話す日本人なのにどうして？。青年森口は大きなショックを受けたようだ。帰京すると森口は学友たちと「観てきた沖縄」のタイトルでガリ版刷りの小紙(A4)を全国の向けに発行した。沖縄の学生に書物を送ろう、文通をしよう、もっと沖縄を知ろうと呼びかけ、7号まで続けられた。森口青年は翌57年カメラ片手に一人で沖縄へ旅している。その旅が、森口豁氏の沖縄との関わりを決定づけ、心の旅と人生がはじまった。言い方を変えれば、日本人として沖縄を米軍統治下に置き、その状況から目をそらして良いのか？日本の戦後処理に近い大命題を抱え込むことになる。

1958年大学を中退し、琉球新報東京支局を訪ね、沖縄へ渡る手がかかりをつける。情熱あふれる青年の意思が伝わり同社へ新聞記者として入社した。しかし、米軍統治下において本土の人が沖縄移住することは容易ではなく、写真修正技術者としてパスポートに渡航許可の印が押されたという。1959年の冬沖縄に移住し、以後

生涯をかけた50年余のジャーナリスト人生を歩むことになる。

森口の作品については前項の高良勉、大嶺沙和の両氏に譲るとして、正直なところ、ぼくは最近まで森口氏の仕事について、ほとんど何も知らなかった。いや、知らなかったというより関心がなかった。どうせウチナーフリークの一人だろう。「ヤマトウンチュがウチナーンチュの本当の気持ちはわからんさ」で沖縄通の本土の人と決めつけていた。しかし、とんでもなかった。

ぼくの無知が大きな誤解であったことを知ったのは、2008年10月、東京国立近代美術館で開催された「沖縄プリズム」展で上映された森口豁作品「沖縄の十八歳」と「一幕一場・沖縄人類館」映像を観る機会があったの事だった。言葉に言い尽くせないほどのショックを受けた。1966年に制作された沖縄の高校生の復帰運動に取り組む青年像が見事に映しとられ、団塊世代のぼくは館内の椅子に座り、しばしへたり込んでしまった。ぼくは、1969年の夏休で帰省した時、「沖縄の祖国復帰を実現させよう」をリックの背にゼッケンを貼り付け、大きな日の丸片手に、ひめゆり丸で鹿児島へ、列車とバス、ヒッチハイクで東京まで行った。旅の先々で日の丸にサインを入れてもらう復帰運動一人旅の心境に重なった。忘れていたぼくの青春にタイムスリップした瞬間だった。

以後、著書の「沖縄こころの軌跡」、「ヤマト嫌い」、「『安保』が人をひき殺す」、「だれも沖縄を知らない」、「ミーニシ吹く島から」、「沖縄近い昔の旅」を拝読した。まず挿入された写真に目をうばわれた。ぼくの10歳の頃の記憶の奥に沈んでいた風景に出会った想いだった。また「ヤマト嫌い」で池宮城秀意の長男、紀夫氏が昭和という時代を「鱗(うわばみ)色」と言った下りは重たい。ドキュメンタリー作家の重厚で繊細かつ骨太の著書として手元にずっと置いていたい本である。

今企画展は安保改定50年を節目に開催する展示会である。TVドキュメンタリー作家を「一坪百姓」と自ら名乗る森口氏。63年作品「乾いた沖縄」の処女作や、78年の「激突死」などエネルギーな作品の数々は強烈である。また、復帰前の沖縄の記憶(風景)を鮮明に切り取ったリアルな写真群、今展で試みたマルチ大画面の組み写真は圧巻だ。その作品は「安保と沖縄」、「ヤマトと沖縄」の再考を喚起する。信じ難いが、森口氏は73歳にして初めての個展である。人生の全てをヤマトびとへ「沖縄問題」は「日本の問題」と吠えぬいている。

昨年から普天間米軍基地問題がこじれ、その本質がみえてきた。差別は憎しみを生み未来を暗くする。同情はいらない。相手の立場に立つ視座が求められる。ヤマト人の巧みな言葉に「拝み倒されない」ためにも多くの人びとに観て頂きたい作品群である。

(画廊主/上原誠勇)